

あんなとこ こんなトコ



「穂谷・大和棟の家」

はじめに

「あんなとこ こんなトコ」は、『枚方市議会報』をより親しみやすく読んでいただくために、平成4年2月1日号(第156号)から連載を始めたコラムです。市内の地名をキーワードに地域の歴史や現状をコンパクトに紹介し、私たちの住むまちを知るコラムとして定着しました。平成18年8月1日号(第244号)で連載50回目を迎えたことを契機に、これまで連載したコラムをまとめてホームページに掲載しました。

表記の統一を初めとした最小限の訂正を加えたほか、掲載当時と現在で異なる事柄や、地域史研究の進展を踏まえて新たにわかったことなどは脚注で補い、写真については撮り直すとともに、掲載枚数を追加しました。

どのページからご覧いただいても結構です。枚方の魅力を再発見していただければ、これに勝る喜びはありません。



- | | | | |
|------|-------|------|-------|
| その1 | 枚方 | その26 | 渚 |
| その2 | 伊加賀 | その27 | 藤阪 |
| その3 | 磯島 | その28 | 泥町・三矢 |
| その4 | 甲斐田 | その29 | 田口 |
| その5 | 春日 | その30 | 小倉 |
| その6 | 楠葉 | その31 | 野 |
| その7 | 招提 | その32 | 坂 |
| その8 | 杉 | その33 | 尊延寺 |
| その9 | 田宮 | その34 | 禁野 |
| その10 | 出口 | その35 | 宇山 |
| その11 | 茄子作 | その36 | 蹉跎 |
| その12 | 長尾 | その37 | 香里園 |
| その13 | 中宮 | その38 | 氷室 |
| その14 | 中振 | その39 | 山田 |
| その15 | 船橋 | その40 | 御殿山 |
| その16 | 村野 | その41 | 菅原 |
| その17 | 香里ヶ丘 | その42 | 牧野 |
| その18 | 岡・岡新町 | その43 | 出屋敷 |
| その19 | 養父 | その44 | 楠葉中之芝 |
| その20 | 津田 | その45 | 川越 |
| その21 | 上島・下島 | その46 | 車塚 |
| その22 | 山之上 | その47 | 高塚 |
| その23 | 走谷 | その48 | 王仁公園 |
| その24 | 穂谷 | その49 | 枚方上之町 |
| その25 | 片鉾 | その50 | 交野ヶ原 |

掲載写真一覧表

小見出し		No.	標題	提供者
その1	枚方	1	渚院(『河内名所図会』)	
その2	伊加賀	2	意賀美神社(枚方上之町)	
その3	磯島	3	八幡神社(磯島元町)	
		4	八幡神社鳥居	
その4	甲斐田	5	甲斐田町	
		6	長泉寺(甲斐田町)	
その5	春日	7	春日神社(春日元町1丁目)	
その6	楠葉	8	楠葉平野山瓦窯跡出土の四天王寺創建時素弁 八葉蓮華文軒丸瓦(飛鳥時代)	枚方市教育委員会
		9	くずはモール	
その7	招提	10	敬応寺(招提元町3丁目)	
		11	招提元町3丁目	
その8	杉	12	杉2丁目から1丁目を望む	
		13	大杉祠(杉2丁目)	
その9	田宮	14	田宮本町(正面が浄光寺)	
その10	出口	15	光善寺(出口2丁目)	
		16	水面廻廊(桜町付近)	
その11	茄子作	17	春日神社(茄子作3丁目)	
		18	方形周溝墓(茄子作遺跡)	枚方市教育委員会
その12	長尾	19	正俊寺(長尾宮前2丁目)	
		20	石造十三重塔	
その13	中宮	21	中宮平和ロード(中宮西之町)	
		22	百済寺跡(中宮西之町)	
その14	中振	23	蹉跎神社(南中振1丁目)	
その15	船橋	24	二ノ宮神社(船橋本町1丁目)	
		25	船橋川	
その16	村野	26	旧村野村高札場(村野本町)	
		27	村野神社(村野本町)	
その17	香里ヶ丘	28	陸軍用地標柱(香里ヶ丘2丁目)	
		29	旧香里製造所煙突(香里ヶ丘8丁目)	
その18	岡・岡新町	30	東見付(新町1丁目)	
		31	宗左の辻に立つ道標(岡本町)	
その19	養父	32	養父元町	
		33	比丘尼塚古墳の須恵器	枚方市教育委員会

その20	津田	34	春日神社(津田元町1丁目)	
		35	津田サイエンスコア(津田山手2丁目)	
その21	上島・下島	36	下島付近の京街道(牧野下島町)	
		37	船橋川	
その22	山之上	38	竹細工製作風景	枚方市教育委員会
その23	走谷	39	翠香園ふれあい公園(翠香園町)	
		40	翠香園ふれあい公園(翠香園町)	
その24	穂谷	41	そうめんの門干し	枚方市教育委員会
その25	片鉾	42	杉ヶ本神社(片鉾本町)	
		43	郊祀壇の説明板(杉ヶ本神社)	
その26	渚	44	旧渚院観音寺鐘楼(渚元町)	枚方市教育委員会
その27	藤阪	45	旧田中家鋳物民俗資料館(藤阪天神町)	
		46	復元竪穴式住居(同資料館)	
その28	泥町・三矢	47	旧泥町(三矢町)	
		48	西見付(堤町)	
その29	田口	49	田口氏墓(田口3丁目)	
		50	山田神社(田口1丁目)の勧請縄	枚方市教育委員会
その30	小倉	51	牧野車塚古墳(車塚1丁目)	枚方市教育委員会
		52	牧野車塚古墳史跡標柱	
その31	野	53	春日神社(野村南町)	
		54	野村元町	
その32	坂	55	片埜神社本殿(牧野阪2丁目)	
		56	片埜神社石造灯籠	
その33	尊延寺	57	巖島神社末社春日神社本殿(尊延寺5丁目)	
		58	才次郎の墓(尊延寺5丁目)	
その34	禁野	59	禁野車塚古墳(宮之阪5丁目)	枚方市教育委員会
		60	禁野火薬庫土塁(上野2丁目)	
その35	宇山	61	宇山1号墳横穴式木室と木棺直葬墓	枚方市教育委員会
		62	宇山1号墳出土銀象嵌直刀鏝	枚方市教育委員会
その36	蹉跎	63	蹉跎神社(南中振1丁目)	
その37	香里園	64	創造の森(香里園山之手町)	
その38	氷室	65	そうめんの門干し	枚方市教育委員会
その39	山田	66	山田池浮御堂	
その40	御殿山	67	御殿山生涯学習美術センター	
		68	御殿山神社(渚本町)	
その41	菅原	69	菅原神社(藤阪天神町)	
		70	菅原神社(長尾宮前1丁目)のテンダイウヤク	

その42	牧野	71	片埜神社南門(牧野阪2丁目)	
		72	九頭神麿寺屋瓦出土状況	
その43	出屋敷	73	東高野街道(出屋敷元町1丁目)	
		74	円通寺(出屋敷元町1丁目)	
その44	楠葉中之芝	75	久修園院(楠葉中之芝2丁目)	
		76	楠葉砲台跡標柱(楠葉中之芝2丁目)	
その45	川越	77	南部生涯学習市民センター	
その46	車塚	78	牧野車塚古墳鱗付円筒埴輪出土状況	枚方市教育委員会
		79	牧野車塚古墳墳丘テラス葺石出土状況	枚方市教育委員会
その47	高塚	80	鷹塚山(高塚町)	
		81	鷹塚山遺跡出土分銅形土製品	枚方市教育委員会
その48	王仁公園	82	王仁公園	
		83	平和の像(王仁公園)	
その49	枚方上之町	84	御茶屋御殿跡	
		85	旧万年寺石塔	
その50	交野ヶ原	86	惟喬親王遊獵(『河内名所図会』)	

※ 上記表中[提供者]欄が空欄の写真は、市議会事務局で撮影。

協力：枚方市教育委員会 社会教育課
枚方市立中央図書館 市史資料室
(財)枚方市文化財研究調査会
表紙：「穂谷・大和棟の家」伊藤 隆

その1 枚方

(平成4年2月1日号—第156号)

私たちの住んでいる枚方は、『日本書紀』にも「比羅賀」[ひらかた]と記されている*1ように、かなり古くから名の知れた土地であることが察せられます。

また、この地は、平安時代には都の貴族階級の狩猟地として知られ、ここで幾多の



1 渚院(『河内名所図会』)

歌人が後世に残る歌を詠んだりもしました。中でも、在原業平[ありわらのなりひら]が渚の桜をめでた「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」という歌は有名で、『古今集』にも入っています。

このように、枚方には長い歴史があり、市内のあちらこちらに、由緒のある地名も数多く残っています。議会報編集委員会では、私たちのまち枚方の各所を順次、皆さんにご紹介してまいります。

どうぞお楽しみに。

*1 『日本書紀』 継体天皇24年条。

その2 伊加賀

(平成4年5月1日号—第157号)

皆さんは、伊迦賀色許男命[いかがしこおのみこと]という人物の名を、耳にしたことがありますか。『古事記』や『日本書紀』によると、彼は崇神[すじん]天皇のおじに当たり、その立場を背景に勢力を誇った人物で、淀川と天野川の合流する地域を支配していたと記されています*1。当時の交通手段が主に船だったことを考えると、淀川と天野川の合流する地域は、交通の要衝であったろうと考えられます。そんな地域を支配していたことから、彼がいかに権勢を誇っていたか、十分推しはかることができます。伊加賀の地名は、彼の名にちなんでつけられたと言われています。



2 意賀美神社(枚方上之町)

意賀美[おかみ]神社の由緒に、彼の住居が現在の伊加賀北町のあたりにあったことが書かれています。今では伊加賀北町も、緑に囲まれた住宅街になっており神社由緒で彼の住居跡と書かれている付近からは、淀川や枚方丘陵、かなたに高槻・京都の山地など、すばらしい風景が眼前に広がっています。はるか昔、彼もこの地で四季折々に変化するすばらしい風景の色を楽しんだことでしょう。

*1 『記・紀』本文には「おじ」とは記されないが、『旧事本紀』[くじほんぎ]などの記述を総合するとそのようである。また、「淀川と天野川の合流する地域を支配していた」の記述は、いづれにも見当たらない。

その3 磯島

(平成4年7月15日号—第159号)

枚方には渚のように水に関係した地名がいくつかあります。上島・下島・磯島は、「島」という字が示すように、昔は淀川の川中島でした。上島は船橋川が、下島は穂谷川が、磯島は天野川が、それぞれ淀川へ流れ込むところに土砂が堆積してできた島と思われます。

ところで、今回、磯島の歴史をひもといてみて意外な事実がわかりました。それは、磯島村が明治7年に河内国交野郡に組みかえられる前は、高槻側の摂津国の村であったということです。摂津国であったことは、磯島元町にある八幡神社の古い鳥居に刻まれた文字「摂津国嶋上郡磯島村」からも明らかです。この鳥居は、寛保[かんぼう]3年(1743)に建立されているので、おそらく、それよりもずっと以前、淀川が現在よりも東南の地を流れていた時代に、川中島が磯島村となり、村自体が枚方から離れていたため、摂津国に属していたのではないのでしょうか。



3 八幡神社(磯島元町)



4 八幡神社鳥居

『枚方市史』によれば、磯島の村人が正徳[しょうとく]年間(1711~6)に摂津国嶋上郡の高槻城下へ野菜を売りに出かけたとあります。このように磯島村は淀川を挟んではいましたが、高槻側とも交流が深く、当時180間(約325メートル)あった淀川を渡し舟を使って行き来したことがうかがえます。

現在の磯島周辺は、府道京都守口線や京阪電車が走り、その沿道には事業所や住宅などが建ち並んでいます。しかし、府道京都守口線から淀川に向かって小道を歩くと歴史を刻む家もあり、旧村のたたずまいを見せてくれます。

淀川の堤防は高く、磯島から高槻側を眺めることはできませんが、ここが川中島だったことを思いながら八幡神社にその面影を探してみてもはどうでしょうか。

その4 甲斐田

(平成4年11月1日号—第160号)

府道杉田口禁野線をどんどん東へ歩いていくと小松製作所^{*1}の大きな門を過ぎたあたりから急に道幅が狭くなってきます^{*2}。すれ違うバスに気をつけ、さらに進むと、須山町のバス停がある少し開けたところに出ます。このあたりが甲斐田[かいた]です。



5 甲斐田町

旧の甲斐田は、上野・新之栄・須山にまで及ぶ大きな村でしたが、現在の住居表示で残っているのは、甲斐田町、甲斐田新町、甲斐田東町だけです。

甲斐田の由来には諸説が伝えられています。甲斐の山という相撲取りが、勝ったほうびにももらった土地だとか、甲斐の武田氏の出身者が地主になったからだとか、山と山との間の狭い田という意味の峡田[かいた]からきているとか。しかし、どれも決め手になるものはありません。甲斐田町の道路は、いずれも細く曲がりくねっており、集落の周辺には外壕のような川があり、西の口、北の口など、村の出入口のような小字地名が残っています。これは外敵から集落を守るための地形をとっていたことを物語っています。



6 長泉寺(甲斐田町)

甲斐田の村には、長者伝説があります。甲斐田町の長泉寺には、長者の屋敷に祭られていたという甲斐田仏と呼ばれる阿弥陀様が今も祭られています。

*1 現関西外国語大学。

*2 近年、拡張されている。

その5 春日

(平成5年2月1日号—第162号)

J R津田駅から西へ進むと、間もなく春日地域に入ります。春日は、中世末期に津田山麓の皇田 [はただ] 村に住んでいた住民が移住してできた村といわれています。

平地の真ん中にあるため、村落の周りを濠 [ほり] で囲んだ環濠 [かんごう] 集落として発達し、今でも集落を歩くと幅の広い水路が残っていて*1、当時の様子がしのべれます。貴重な水源としての河川から遠く離れた春日にとって、水の確保は死活問題であり、濠は村落を外敵から守るだけでなく、かんがい用水としても使われてきました。水を逃さないようにするための人工のため池も、多く見られます。



現在、春日西町には枚方市営水道の春日受水場があり、3万トンもの飲料水をためることができます。水の確保で苦勞していた昔の住民のことを思えば、時代の流れとはいえ不思議な気がします。この受水池の地表部分は、テニスコートに整備され、多くの市民に利用されています。

7 春日神社(春日元町1丁目)

*1 春日神社の南・西を通る水路も環濠の名残か。

その6 楠葉

(平成5年5月1日号—第163号)

京阪樟葉駅から京街道を北へ歩くと、町楠葉のあたりで、白壁づくりの蔵や楠の木陰の残る、旧家のたたずまいを見ることができます。

光明院あたりから東へ歩くと、閑静な住宅街が見えてきます。そこは北楠葉町で、八幡市との境にあります。昭和49～50年に行われた楠葉東遺跡^{*1}の発掘調査で、ここから大昔の土器や瓦が大量に出土しました。

平安時代の歌謡集『梁塵秘抄』[りょうじんひしょう]の中には、「くずはの御牧[みまき]の土器づくり…」というくだりがあり、楠葉が朝廷の牧場であると同時に土器製造地であったことをしのぶこ

とができます。また、飛鳥時代に聖徳太子が創建したといわれる四天王寺には、楠葉でつくられた瓦が使用されていたこ

とも判明しました。しかし、今ではその名残もなく、土器や瓦が出土したことを記念した説明板が、北楠葉公園と公園北側の住宅街にひっそりと立っているだけです。



8 楠葉平野山瓦窯跡出土の四天王寺創建時素弁八葉蓮華文軒丸瓦(飛鳥時代)



9 くずはモール

四天王寺が創建(593年)されて今年(1993年)でちょうど1400年になります。この節目の年に、四天王寺で使用された楠葉の瓦を、この欄で取り上げることができたのも、何かの因縁かもしれません。

現在、楠葉はローズタウンなどの新興住宅街として知られ、駅前のモール街^{*2}は、きょうも買い物客であふれています。

*1 瓦窯跡は枚方・八幡両市にまたがっており、八幡市域の遺構も含めて楠葉平野山瓦窯跡群と呼ぶ。

*2 昭和47年にオープンした「くずはモール街」は、平成17年4月に「くずはモール」として新たにオープンした。

その7 招提

(平成5年7月1日号—第165号)

今回ご紹介する招提[しょうだい]^{*1}。この地名の意味をご存じでしょうか。辞書によると、仏教用語で世界をわが家として世間にとらわれることなく、自由に修業をしている僧のこと^{*2}をいい、奈良の唐招提寺の寺名にあらわれていると書かれています。



10 敬応寺(招提元町3丁目)

招提は、戦国時代、寺内町[じないまち]だったことが歴史に残っています。寺内町というのは浄土真宗の寺を中心に形成された集落のことで、集落全体が境内とみなされ、年貢を免除されるという特権がありました。天文12年(1543)8町四方(1町は約100メートル)の境内に中心となる道場(後の敬応寺・招提元町3丁目)を建てるとき、1つの石を掘り出し、その石に「招提寺内」の銘があったところから地名がついたという話もあります。当時の招提村は、道場を中心に東は長尾

から西は渚のあたりまでの東西30町、北は船橋から南は田口までの南北21町であったとされています。

約40年間、寺内町として発展しましたが、天正10年(1582)山崎の合戦で明智光秀に味方をしたため特権を奪われ、一般の農村に編入されてしまいました。

戦乱の世とともに揺れ動いた招提村の歴史に思いをはせながら、敬応寺周辺を散策してみてもはいかがでしょうか。



11 招提元町3丁目

^{*1} 昭和50年から大字招提に住居表示が施行され、「招提」の読みは「しょうだい」とされた。国語辞典等にも「しょうだい」と表記されるが、地元では「しょだい」と呼ぶ人が多い。元龜元年(1570)に織田信長が招提に宛てた朱印状を初め、天正16年(1588)の長束正家・増田長盛連名の書状などには「しよたい」(近世以前の仮名遣いでは拗音を小さくせず、濁点を付さないことが多い。)と記されており、江戸時代の文書には「諸大」の文字を宛てた例(招提村片岡家文書)もあることから、どうやら「しょだい」と呼んでいたようである。

^{*2} あるいは、こうした僧が住む寺院を意味する。

その8 杉

(平成5年11月1日号—第166号)



12 杉2丁目から1丁目を望む

枚方市域の東の先端、氷室地域の入口に今回紹介する杉地区があります。その昔、宮廷に献上する氷を貯蔵する氷室があった杉の集落^{*1}は、現在の国道307号沿いのわずかな土地に、家々がひっそりと建っているだけでしたが、穂谷川対岸の丘陵地(杉山手地区)に大きな住宅地ができるなど、市街化の波が押し寄せ、人口も数倍に膨らみました。しかし、この地区にはまだ自然がたくさん残っています。住宅街の周りには田園風景が開け山々は緑に包まれています。

ところで、杉地区を代表するものに、スモモがあります。スモモは、明治時代から杉で栽培され、昭和41年にはスモモ団地が誕生しました。スモモが純白の花をつける4月には、野鳥やミツバチたちが飛び交います。

さて、杉の地名はどこからついたのか。国道307号を尊延寺に向かって行くと杉地区のはずれに石の柵に囲まれた杉の木があります。地元の人々は「大杉さん」と呼んで、氏神である若宮八幡宮にお参りする前に「大杉さん」にもお参りしていたそうです。昔はさぞ大きな杉の木があったのですが、現在ではその何代目かに当たる若い木が、杉の人々の生活を見守っています。



13 大杉祠(杉2丁目)

^{*1} 『日本後紀』には河内国に3カ所としか記載されていない。氷室の場所として穂谷・杉・芝(尊延寺)などの地名が現れる『氷室郷穂谷氷室遺址権輿紀』は、偽文書であるという説がある。

その9 田宮

(平成6年2月1日号—第168号)

京阪枚方市駅から南へ歩いて行くと、市役所を過ぎたあたりから、今回ご紹介する田宮地区に入ります。田宮の地名は、応神天皇の皇子である二俣王[\[ふたまたのみこ\]](#)の王女田宮姫が住まいを定めたところからきたとされています。

旧の田宮村は、交野郡に属し、『和名鈔』[\[わみょうしょう\]](#)という文献には交野郡田宮郷という記述が残されています。古くは、田宮千軒といわれ繁栄した時代もあったそうですが、江戸時代にはわずかな戸数に減少しています。

田宮地区やその周辺の開発は、昭和4年の京阪電鉄による住宅開発から始まりました。同年、信貴生駒電鉄(現京阪交野線)の枚方東口(同枚方市駅)と私市間が開通。昭和17年、枚方町役場が三矢から岡に移転し、同35年には現在の大垣内町に市役所が建設されるなど、市の中心が東に移るにつれて、田宮地区は開発の適地として重要視され、田畑が次々と新興住宅地になっていきました。

現在では、昭和44年からこの地区で進められていた中部土地区画整理事業も完成し、枚方高田線沿いに店舗等が建ち並んでいますが、田宮本町にある浄光寺のあたりには寺を囲んで旧家がひっそりと建ち、かつての村民たちが、農耕を主として営々と生活を営んでいた様子をうかがい知ることができます。



14 田宮本町(正面が浄光寺)

その10 出口

(平成6年5月1日号—第169号)

京阪光善寺駅から北西に向かい、国道1号を渡ったあたりから、出口の町並みが見えてきます。さらに西へ進むと、細い路地に面して幾つもの土蔵が立ち並ぶ古い家並みが、あちらこちらに見られます。

その一角に、京阪本線の駅名の由来ともなった光善寺があります。光善寺は文明7年(1475)に創建された由緒ある寺で、境内を右手に回ると石のさくに囲まれた高さ10メートルほどの「さ



15 光善寺(出口2丁目)

いかちの木」が目に入ります。住職の話では、竜がその木を伝って天に昇ったという伝説があるそうで、現在は府の天然記念物に指定されています。

光善寺を後にして西へ歩き、住宅街を抜けると出口雨水幹線が見えてきます。この雨水幹線は、昔京街道がこの地を通っていたこともあって、淀川を背にして、歴史と豊かな自然を楽しむ水面廻廊[みなもかいろう]として生まれ変わる予定で、整備が進められています。



16 水面廻廊(桜町付近)

目前に見える淀川の堤を越えると、広さ約19ヘクタールの淀川河川公園に出ます。休日になると、市民の憩いの場として、明るい声があちらこちらから聞こえてきます。

古きよき時代の竜伝説を残しながら、淀川の流れとともに発展してきた出口地区は、市民の憩う明るい町として変容しようとしています。

その11 茄子作

(平成6年7月15日号—第171号)

茄子作[なすづくり]の由来については、いくつかの説があります。昔、村が茄子の名産地だったことから、あるいは、高貴な方が村でとれた茄子を食し、おいしいと感動したという話から茄子をつくる村としたというのが一説。また、平安時代、惟喬親王[これたかしんのう]の狩猟用の鷹につける名鈴[なすず]をつくらされた村が名鈴作村で、いつの間にか茄子作村となったという説もあります。どの説も残念ながら確かな根拠はありません。



17 春日神社(茄子作3丁目)



18 方形周溝墓(茄子作遺跡)

昭和49年、この地区で弥生時代後期の住居跡と墓地跡が発見されました。この遺跡の特徴は、有力者のものだと思われる方形周溝墓[ほうけいしゅうこうぼ](1辺12メートル、幅1メートルほどの溝をコの字形にめぐらせた墓)があることです。北河内地方で初めて発見されたため、当時、多数の見学者がやって来ました。また、この墓の北側には大きな溝が掘られ、中から古墳時代初期までの土器がたくさん出土しました。このことから、この地には古くから、人が住み続けていたことがわかります。

2000年ほど前から人が住んでいた茄子作。茄子でも名鈴でも、壮大な歴史の中では、ほんのささいなことにも思えてきます。

その12 長尾

(平成6年11月1日号—第172号)

生駒山系の緑を背景に枚方市東部に位置する長尾。昔は、交野[かたの]から長尾にかけての帯を、交野ヶ原と呼んでいました。ハギやススキが咲き乱れ、散在する池にはカモなどの水鳥が羽を休める静かな地であったと伝えられています。

さて、長尾という名称はどこから来たのでしょうか。この地を長尾と命名したのは、江戸時代の領主久貝[くがい]氏だと伝えられています*1。命名の理由は、河内の北の果ての尾のようなどころだからだとされていますが、確実な文献は残っていません。

現在の長尾は、住宅開発などで都市化が進み、JR片町線の快速が長尾、京橋間を25分で結ぶようになり、今後もさらに開発が進むと思われます。

その片町線の長尾駅の傍らには、久貝氏が菩提寺として建立した正俊寺[しょうしゅんじ]があります。正俊寺は、深い木立に囲まれた本堂、鎌倉期の十三重石塔*2、枯山水の庭園など、遠い歴史を感じさせ、交野ヶ原の静寂な秋を今なおとどめています。皆さんも、一度正俊寺を訪れてみてはいかがでしょうか。



19 正俊寺(長尾宮前2丁目)



20 石造十三重塔

*1 江戸時代以前から長尾の地名は確認できる。久貝氏が長尾を開発した際、福岡村と名付けたが、貞享3年(1686)長尾村に戻した。

*2 大阪府指定有形文化財。

その13 中宮

(平成6年2月1日号—第174号)

枚方市のへそ、すなわちちょうど真ん中に、中宮地区があります。戦前、この地には、旧国鉄津田駅から池之宮を通り、中宮小学校あたりから大きく北に曲がって、現在の小松製作所^{*1}の敷地の中まで線路が敷かれていました。ところが、貨車に乗せられていたのは、冷たい光を放つ砲弾だったのです。当時を知る人は、そのことについて暗い思い出を持っています。ここには陸軍造兵廠[ぞうへいしょう]枚方製造所と禁野火薬庫があり、禁野火薬庫が昭和14年3月1日、大爆発を起こして約100人の死者^{*2}と600人に上る負傷者を出したからです。それから50年目に当たる平成元年に、本市は3月1日を平和の日と定め、毎年さまざまな平和事業を行っています。線路跡は、今では機関車のモニュメントを配した平和ロードとして整備され、市民の憩いの場となっています。



21 中宮平和ロード(中宮西之町)

また、この中宮地区には、百済王[くだらのこにきし]氏の氏寺である国の特別史跡・百済寺跡があります。百済王氏は、7世紀中ごろの百済国の義慈王[ぎじおう]の子である善光^{*3}が朝廷から百済王の姓をもらい、代々朝廷に仕えたとされています。また、その子孫の百済王敬福は、功績によって河内守に任ぜられ中宮に住むようになったと考えられています。その後も、百済王氏は繁栄を続け、桓武天皇の後宮に百済王氏の女性が3人入るなど、天皇の外戚にもなりました^{*4}。



22 百済寺跡(中宮西之町)

中宮の地名の由来は、天皇の行宮があったためとか、中宮職がこの地を支配したためとか言われています。いずれにしても、朝廷との深い結びつきからついた地名に違いありません。

*1 現コマツ。

*2 陸軍の報告書では94人。これ以外に朝鮮人と思われる1人を含む2人の死者名を記した帳簿もある。

*3 禅広とも書く。

*4 桓武は、母親の高野新笠[たかののにいがさ]が百済第25代武寧王[ぶねいおう]につながる渡来系氏族出身だったので、百済王氏は朕の外戚なりと詔を下した。

その14 中振

(平成7年8月1日号—第177号)

枚方市の南西部に位置する中振[なかぶり]地区。南中振の丘陵に建つ蹉跎[さだ]神社は、昔の中振をしのぶ、数少ない場所の一つです。

神社の創建には、こんな伝説があります。昌泰[しょうたい]4年(901)、菅原道真[すがわらのみちざね]が大宰府に流される途中、この地で休息をとりました。その道真を慕って、都から娘の苺屋姫[かりやひめ]が跡を追ってきたのですが、姫が到着したときには、道真は旅立った後でした。姫は、父恋しさの余り小山に登り、足ずりして悲嘆に暮れたそうです。足ずりすることを古語では「蹉跎」といいます。後世の人は、姫の孝行心を尊んでこの地を蹉跎山と名づけ、神社を創建したといわれています。

蹉跎村は、中振・走谷・出口の3村が合併して明治22年に誕生しましたが、約半世紀で枚方町に合併されてしまいました。中振地区は、合併当時蹉跎村の面積の半分以上を占め、人口900人もの大きな村落でした。今も残る町並みは、その歴史の重みを感じさせます。

中振地区は、京阪電鉄の線路を境に、東側は段丘、西側は平野になっています。段丘は、縄文時代、大阪湾の波打ち際だったことを示すものとされています。

かつては、縄文人が獲物を追っていた中振の丘。今は、大阪市立高校をはじめ、蹉跎小学校、香里丘高校、関西創価小学校が集まり、生徒・児童が集う学びの丘となっています。



23 蹉跎神社(南中振1丁目)

その15 船橋

(平成7年11月1日号—第178号)

辞書によると、船橋とは、川などに船やいかだをつなぎ並べ、その上に板を渡して橋がわりとしたものと説かれています。

平安時代、貴族が遊猟のため交野ヶ原を訪れるためには、今でいう船橋川を渡らなくてはなりません。しかし、橋を架けても流されてしまうことが多かったので、船を並べて橋にしたのだと考えられます。このことから、この地を船橋と呼ぶようになったといわれています。



24 ニノ宮神社(船橋本町1丁目)

船橋川は、普段は水量の少ない川ですが、大雨が降ると急に水量が増し、過去何度も洪水を起こしています。天井川であることと、新田開発のために人為的に流路を変更したことが原因と考えられます。現在では、堤防も整備され、洪水を起こすことはなくなりましたが、時には大雨で、かれた川が大きく変貌することに変わりはありません。

船橋川は流路を変えても、いにしえ人から現代人まで、人々の暮らしを見詰めているように思います。

船橋は、もともと本郷(現船橋本町地区)と枝郷(現南船橋地区)合わせて100戸余りの小さな集落で、その周りに田畑が広がっているという村でした。現在も、船橋本町は曲がりくねった狭い小路など中世の自衛村の面影を色濃く残しています。集落の北側にある二ノ宮神社は、船橋・養父・宇山の氏神で、江戸時代には三郷から、けんかみこしが出たそうです。



25 船橋川

その16 村野

(平成8年2月1日号—第180号)

羽衣伝説や七夕伝説などのロマンをのせて淀川にたどる天野川の流れ、その流れが初めて枚方と出会うところが村野です。

現在、住居表示で「村野」と名のつく地区は、京阪交野線の村野駅周辺だけですが、村野村は、明治22年に合併して川越村になる以前は、亥田(あるいは犬田、現在の印田)、藤田、釈尊寺をはじめ、茄子作東町や池之宮の一部、星丘、桜丘など、広い範囲を占めていました。

村野村の東側には東高野街道が走り、中央部には天野川が流れ、また磐船街道も走るなど、この地は、交通の要衝であったと考えられます。2つの街道が接する付近には、その昔、犬田城があったとされ、応仁の乱の折には、畠山政長軍と畠山義就軍とがここを舞台に合戦に及んだそうです。

村野のいわばへそに当たる村野本町には、浄土宗光明寺があります。光明寺の開基は不詳ですが、薬師如来座像や恵心僧都[えしんそうず]の作といわれる阿弥陀仏座像などが祭られています。

また、光明寺をさらに北へ行くと、村野神社があります。村野神社は、弘安2年(1279)に片埜神社から分霊されて以来、村野産土神[うぶすながみ]として、光明寺とともに村野の人々の暮らしを見守ってきました。



27 村野神社(村野本町)

かつて、村野神社では1月15日に正月のしめ飾りなどを燃やした「とんど」が行われていました。村人は、「とんど」の火を持ち帰り、小豆粥[あずきがゆ]を炊いて食し、無病息災を願っていました。

「とんど」は、以後その場所を移し、現在では桜丘小学校の校庭で引き継がれています。

村野は、神社や寺を囲む旧家とその周辺を新興住宅が建ち並ぶという形で発展をしてきました。古い伝統を守る姿と、新しいものを積極的に受け入れようとする息吹が強く感じられるまちです。



26 旧村野村高札場
(村野本町)

その17 香里ヶ丘

(平成8年5月1日号—第181号)



28 陸軍用地標柱(左)(香里ヶ丘2丁目)、
29 旧香里製造所煙突(右)(香里ヶ丘8丁目)

枚方市南部の丘陵地帯に香里ヶ丘地区があります。現在は団地等が建ち並んでいますが、かつて、ここには陸軍造兵廠[ぞうへいしょう]の香里製造所がありました。昭和14年に操業を開始した香里製造所は、終戦後に閉鎖されるまで150ヘクタールの敷地を持つ日本有数の火薬製造所でした。

昭和27年、火薬製造所の再開が計画された際は、地域住民が強力に反対運動を繰り広げ、ついに計画を断念させました。

昭和31年から日本住宅公団による香里団地建設が行われ、33年には「香里ヶ丘」の地名が誕生し、入居が始まりました。

香里ヶ丘地区は、並木のある道路、公園、商店街、下水道などが整備された近代的なまちでした。また、住民は年齢も若く、旧市域とは異なった地域社会を形成し、活発な住民運動によって全国初の乳児保育を含む公立保育所を実現させました。

建設されてから40年以上経つ香里団地では、今、建てかえが進められています。しっかり枝葉を張った街路樹、周辺地域に溶けこんでいる自然環境などを残しながら、人にやさしく活気あふれるまちへの再生が望まれます。

その18 岡・岡新町

(平成8年5月1日号—第181号)

枚方市の表玄関である枚方市駅、この周辺が今回紹介する岡と岡新町です。岡は、現在ではビオルネのある岡本町、百貨店や銀行が集まる岡東町、優美な塔を持つ教会が建つ岡南町、坊主池公園がある岡山手町の4つの町名に変わっています。また、岡新町は、新町1・2丁目と町名を変え、今では府住宅供給公社の団地やメセナひらかた等が建っています。



30 東見付(新町1丁目)

ところで、現在ビオルネの南館と北館の間にある歩行者専用道路は、以前、京街道と呼ばれていました。江戸時代、幕府は東海道の宿駅制度を定めました。京街道も東海道の延長とみなされ、街道沿いにある岡・岡新町・三矢・泥町の4カ村は、枚方宿に指定されました。明治になって宿駅制度が廃止されるまで、この一帯は大変なにぎわいを見せた町でした。

枚方宿は、岡新町東端の東見付[ひがしみつ

け](現在の新町1丁目)から西見付(現在の堤町西端)まで約1.5キロに及び、天保年間の記録によると、本陣や旅籠[はたご]を含め家数341軒、人口1,592人もの大きな宿場町でした。

現在の枚方市駅周辺には、宿場町の面影はありませんが、岡本町の宗左[そうざ]の辻に立つ道標から当時の様子をしのぶことができます。宗左とは、江戸時代製油業を営んでいた角野宗左[かどのそうざ]のことで、宗左が住んでいた辻は、京街道と磐船街道の分岐点になっていました。

昔、京へ向かう旅人たちでにぎわった岡、岡新町は、現在も枚方市の中心地として、通勤・通学者が集中し、買い物客等にぎわっています。



31 宗左の辻に立つ道標(岡本町)

その19 養父

(平成8年11月1日号—第185号)



32 養父元町

枚方市の北中部に位置し、南北を穂谷川と船橋川に挟まれた地域に、今回紹介する養父地区があります。旧『枚方市史』によると、養父[やぶ]という地名は、この地に住む物部[もののべ]氏の子孫、養父氏から由来したものではないかと記されています。

養父地区では、古墳が幾つか発見されましたが、その中でも、比丘尼塚[びくにづか]は、飛鳥時代、蘇我氏と物部氏が覇権争いをしたときに、争いに巻き込まれた尼僧が養父の地で切られて埋められた

場所だという言い伝えが残っています。比丘尼塚は、殿山[とのやま]第二小学校の運動場で発見された古墳で、須恵器[すえき]が20数点採集されました。円墳と伝えられていますが、原形は残っておらず、また、葬られた尼僧の名前など、詳しいことまでは、残念ながら明らかになっていません。しかし、養父地区は物部氏と関連深い土地であったことから、物部一族の尼僧が養父で亡くなり、古墳がつくられたとしても不思議ではありません。

悠久の歴史をしのばせてくれるこの町には、まだ名もない古墳が幾つも眠っている可能性があります。いつもとは違った気持ちでこの地を散歩すると、新しい発見があるかもしれません。



33 比丘尼塚古墳の須恵器

その20 津田

(平成9年2月1日号—第187号)

生駒山系の北、津田山のふもとに広がる落ちついた集落が、今回紹介する津田です。津田は、昭和30年に枚方市と合併するまで、津田村・津田町の名で、東部地域に受け継がれてきた由緒ある地名の一つです。

古い記録から写されたといわれる『興福寺官務牒疏』[こうふくじかんむちょうそ]^{*1}の中には、尊延寺や百済寺等とともに津田寺があり、他の寺院が天平年間(8世紀)に建立されていることから見て、津田の地名もこのころから存在したと考えられています。

津田の集落を東へ向かうと、国見山に至る道につながります。標高285メートルの国見山頂上付近には^{*2}津田城(国見山城)がありました。津田城は、延徳2年(1490)橘正信が築いたとされ、橘氏は津田の地名から津田周防守正信と名乗り、津田・穂谷・尊延寺等を領したとされています。津田氏は隆盛を誇っていましたが、織田信長の畿内平定の戦いで、天正3年(1575)に城は焼け落ちました。

その後、津田氏は国見山のふもと(本丸山)に居城を構えましたが、山崎の合戦で明智光秀方に加勢したため、秀吉軍に本丸山城も焼き払われてしまいました。

昭和になり、本丸山城等の遺構は発見されましたが、津田城の全容等は明らかではありません。

現在、津田には、関西学術研究都市の諸施設が集まり、本市の東部開発の拠点として整備されつつあります。新しい顔の津田を、戦国時代の武将はどのように見守っているのでしょうか。



34 春日神社(津田元町 1 丁目)



35 津田サイエンスコア(津田山手 2 丁目)

^{*1} この史料は、近年、偽文書の疑いがあり、これに基づく記述は信憑性が乏しいという説がある。

^{*2} 以下の記述の基になった史料についても信用できないとする説もある。

その21 上島・下島

(平成9年5月1日号—第188号)

上島・下島は、淀川と船橋川、穂谷川の三川に囲まれた、現在の上島町、上島東町、牧野下島町、牧野北町の地域に当たります。地名が示すように、昔この地域は淀川に浮かぶ川中島で、生駒山系を源とする船橋川と穂谷川が運んだ土砂のたい積によってできた中洲であったと思われます。戦国時代には川島村と呼ばれ、江戸時代に上島村と下島村に分かれたそうです。

豊臣秀吉は京と大坂を最短で結ぶ文禄堤を築きました。後年、その上に京街道が整備され、上島村、下島村も多くの人々が行き交う通過地になりました。幕末



36 下島付近の京街道
(牧野下島町)



37 船橋川

には、第14代将軍徳川家茂が京の混乱を鎮めるために、再三京街道を上り、上島村の上田家に休憩して茶代を払ったという記録が残っています。

また、旗本水野但馬守忠昌の上方知行所[かみがたちぎょうしょ]を預かる陣屋代官であった上島村の吉川惣七郎は『慶応事件記』で、鳥羽・伏見の戦いの模様を記していますが、それによると上島付近も戦いの舞台になったそうです。鳥羽・伏見の戦いで敗退し、京街道を逃げてきた一部の幕府軍は、船橋川堤に集まり、陣屋裏山に大砲を据えつけて、反撃の準備をしようとしていました。しかし、官軍の藤堂軍が攻撃し、幕府軍を四散させ、上島、下島など周辺の村々はかろうじて戦火から免れたそうです。

数多くの歴史の舞台となった上島、下島地域も今は、住宅や娯楽施設が建ち並ぶにぎやかなまちへと変わっています。

その22 山之上

(平成9年7月15日号—第190号)

山之上という地名は、枚方丘陵の中腹に位置し、天野川付近から見ると小高い山になっているところから名づけられ、その昔は南條郷と呼ばれていたのが、元和3年(1617)に山之上村に変わったと旧『枚方市史』に書かれています。

さて、現在は住宅地のイメージが強いのですが、戦前は竹製品の産地として知られていたことをご存じでしょうか。山之上は、もともと、耕作地の少ない村でした。そこで、江戸時代の末期ごろから、農家の副業として竹製品の生産を始めたのが起源だとされています。

明治中期以降は技術が改良され、「花かご」や「ざる」などが盛んにつくられるようになり、昭和7年には、竹細工出荷組合も組織されました。昭和13年ごろから、代用品増産の国策に呼応して、竹かごの輸出や「げた」、「帽子」、「靴底」など生活用品にも竹材を応用し、販路の拡張に乗り出しました。戦時中は、炭鉋や工場の作業用として陸軍から大量注文があるほど山之上の竹製品は有名なものでした。



38 竹細工製作風景

しかし、戦後、プラスチック製品の登場や材料の真竹の激減、後継者不足などのため、今では、竹製品を製作する人は急減し、1人となりました^{*1}。かつて家庭でも当たり前のようにあった竹製品は、今や高級民芸品として店頭には並んでいます。

農村から住宅地へと大きく移り変わった山之上地域ですが、どこか竹のような清潔さとしなやかさを思わせる町並みが続いています。

^{*1} 現在はもうだれも製作する人はいなくなった。

その23 走谷

(平成9年11月1日号—第191号)

今回ご紹介する走谷[はしりだに]村は、現在の走谷1・2丁目、菊丘南町、翠香園町、北中振1・3丁目を含む一帯でした。場所的には、枚方市を南北に走る国道1号を挟んだ両側の地域です。



39・40 翠香園ふれあい公園(翠香園町)

さて、この走谷村の一角をなしていた翠香園町には、かつて「北之溜池」[きたのためいけ]と呼ばれていた池があり、その水は、地域一帯のかんがい用水として使用され、村人の生活になくてはならないものでした。しかし、近年になって都市化が進み、農地が減少すると、このため池に生活排水が流れ込み、ついには悪臭を放つほどにまでなってしまいました。そのため、この池を埋め立て、公園にしようということになり、平成5年4月、子どもからお年寄りまで楽しめる「翠香園ふれあい公園」がオープンしました。

満々と水をたたえ、何百町歩もの水田を潤し、人々の生活を支えてきた「北之溜池」。今その面影はなく、かつての水面からは、子どもたちの歓声が聞こえてきます。

その24 穂谷

(平成10年2月1日号—第193号)

穂谷の特産物といえば、手延べそうめんです。この地域は、東部丘陵に位置しているため寒さが厳しく、その気象条件を生かして、手延べそうめんの生産が始まりました。手延べそうめんの歴史は古く、中世とも天和年間(1681～84)ともいわれていますが、この地方の特産物として広く知られるようになったのは、江戸中期以降だそうです。現在では3軒^{*1}が、この伝統を受け継ぎ生産しています。

毎年、11月から3月にかけて、天気の良い日に庭先で行われる「門干し」^[かどぼし]のすだれ模様は、穂谷を代表する風物詩となっており、それを求めてカメラを手にする人の往来をよく見かけます。

でき上がったばかりの手延べそうめんは、油臭く煮上がりもやわらかいため、倉庫に入れて梅雨の季節を越させます。これを「厄を越させる」にかけて、縁起物としても珍重されています。

もう一つの特産物は、地酒です。山ひだをぬって流れてきた清水と良質の米が地酒を生みました。かつて枚方地方には、9軒の造り酒屋がありましたが、現在では、穂谷と藤阪^{*2}に1軒ずつ存在するだけとなってしまいました。

寒い日の続くこの時期に、地酒の熱かんで一杯やるのも、おつなものではないでしょうか。



41 そうめんの門干し

^{*1} 平成18年現在、穂谷1軒・津田2軒で製造している。

^{*2} 藤阪では平成9年10月23日をもって酒造は廃業したため、現在では穂谷に1軒存在するのみである。

その25 片鉾

(平成10年5月1日号—第194号)

本市が昭和62年に発行した『枚方風土記』には、片鉾にまつわる伝説が幾つか紹介されています。

その一つによると、その昔、桓武天皇が弁当を食べられたときに使った杉のはしを地面に刺したところ、それが根づいて杉になったとされ、片鉾にある「杉ヶ本神社」は、その杉のもとという意味で、名づけられたとされています。



42 杉ヶ本神社(片鉾本町)



43 郊祀壇の説明板
(杉ヶ本神社)

境内の入口には、「片鉾郊祀壇[こうしだん]跡伝承地」の立て札もあります。この郊祀壇は、都の外で祭祀を行うためにつくられるもので、桓武天皇が、長岡京遷都をなし得たのは、天の恵みによるものとして、この地に郊祀壇をつくり、感謝の祭典を行ったとされています。

また、境内の傍らにはひっそりと、阿皆[あか]神社と呼ばれるほこらがたたずんでいます。このほこらは、片鉾ではやり病が広がったときに、旅の僧侶が阿弥陀仏を1カ所に集めて祭れば治ると教えたことから、それに従ったところ、病が治まったという話が残っています。

現在、境内には、伝説の杉はありませんが、別の杉が大きく育ち、子どもたちの格好の遊び場となっています。このように伝説が多い片鉾地域ですが、今ひととき目立つ近代的な建物があります。関西外国語大学の学舎です*1。同大学では、毎年数百名の学生をアメリカ合衆国をはじめとする海外へ派遣する一方、海外からも多くの留学生を受け入れています。留学生は、一般家庭の協力を得てホームステイをしており、日常生活に溶け込んで国際文化交流を実践しています。

伝説を訪ね、また、新たな出会いを求めて、片鉾の町中を散策してみてもはいかがでしょうか。

*1 関西外国語大学は、平成14年に中宮キャンパス(中宮東之町)へ移転し、平成17年に輝きプラザきらら・枚方市立中央図書館が開館した。

その26

渚

(平成10年7月15日号—第196号)

「渚」とは、河・海・湖などにおいて、波が打ち寄せるところという意味です。

旧『枚方市史』にも、「渚は、淀川筋の港湾都市としての特色が見いだされ」と記されているように、古くから淀川を往来する船が出入りし、また文化の中継地として重要な位置を占めていたと考えられます。

さらに、渚といえば、文徳[もんとく]天皇の第1皇子、惟喬親王[これたかしんのう]が、交野遊獵に用いた別荘「渚院」[なぎさのいん]が有名です。例えば、9世紀後半の時代背景が描かれている『伊勢物語』には、惟喬親王が、在原業平[ありわらのなりひら]と狩獵をする話があります。それによれば、都から船で淀川を下ってきた親王の一行が、いったん水無瀬[みなせ](島本町)の離宮に落ちついた後、淀川を下って渚院に入るくだりがあります。折から、周囲は桜が満開だったので、一行は狩りはそっちのけで、美しく咲き誇る花を見て、酒を酌み交わし、歌を詠んだのです。



44 旧渚院観音寺鐘楼(渚元町)

そこで、在原業平は「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(春になると、桜の花はもう咲いたか、いつが見頃か、いやもう雨や風で散ってしまったかなどと大騒ぎするのが人の世の常であるが、いっその世の中に桜というものがなかったならば、お互いに春はもっとのんびりしていただけるのになあ)と、多分に逆説的な和歌をつかって桜の花を賛美したのです。

その後、別荘は荒廃し、明治の初めには廃寺^{*1}となり、本尊は少し北の西雲寺に移されました。ただ、今も渚院跡に残る観音寺の鐘楼と梵鐘だけは、市の文化財に指定されています。

あなたも、『伊勢物語』の舞台となった渚の地を散策し、遠い昔に思いをはせてみてはいかがでしょうか。

^{*1} 渚院跡に建っていた観音寺が廃寺となった。

その27 藤阪

(平成10年11月1日号—第197号)

藤阪の名の由来は、藤の古木が坂道の傍らにあったことから「ふじさか」と呼ばれるようになったと伝えられています。そのため、明治になるまでは、「藤坂」と表記されていました。

藤阪地区は、旧村のたたずまいや田園風景が見られる一方、新興住宅街なども混在し、古くて新しい町の典型といえましょう。

その一部を点描すると、まず王仁[\[わに\]](#)公園には、テニスコートや運動広場、プール、相撲場などがあり、年間を通じて、スポーツを楽しむ多くの人々でにぎわっています。

その王仁公園の横には、旧田中家鋳物民俗資料館があります。この資料館は、枚方上之町で古くから鋳物業を営んでいた田中家の

主屋と工場を移築復元したものです。主屋には民具・農具類が、工場には鋳物の歴史と技術についての展示があり、敷地内には復元された弥生時代の竪穴式住居もあります。

また、藤阪東町には、伝王仁墓[\[でんわにはか\]](#)があります。王仁とは、4世紀に朝鮮半島から日本に渡来し、論語と千字文[\[せんじもん\]](#)を伝えたと言われる王仁博士のことです。先年までの伝王仁墓は荒れていましたが、「王仁塚の環境を守る会」の皆さんが韓国の国花ムクゲを植えるなどして環境整備に努力されたため、今では、韓国からの旅行者の観光コースにもなっています。

そのほか、王仁公園には、ふるさと農園ひらかたの郷や平和の像もあります。また、鴨鍋で知られる、おしゃれなエルサンティサンパレスひらかたも^{*1}建っています。

これらの施設は、JR藤阪駅から徒歩でも行ける観光スポットです。紅葉の美しい季節、秋の風情を探しに出かけられてはいかがでしょうか。



45 旧田中家鋳物民俗資料館(左)(藤阪天神町)

46 復元竪穴式住居(下)(同資料館)



*1 平成17年閉館。

その28 泥町・三矢

(平成11年2月1日号—第199号)

京阪枚方公園駅周辺から、現在の三矢町の東端あたりにかけてが、今回ご紹介する「泥町[どろまち]・三矢」です。

泥町の名は旧『枚方市史』によると、淀川沿いの低湿地の泥田が町になったことに由来し、三矢の名は『大阪府全志』によると、この地に家屋が3軒しかなかったので、「三屋」とされたことに由来すると記述されています。

また、これらの2村は、江戸幕府を開いた徳川家康により、岡、岡新町とともに京街道の宿場町として、「枚方宿」と定められました。この「枚方宿」は、東海道筋でも指折りの大きな宿場町で、行き交う旅人たちで大変なにぎわいを見せていました。中でも三矢は、紀州や西国の大名が参勤交代中に滞在する本陣があり、宿場町の中心地的役割を果たしていました。

しかし、明治時代に入り、宿駅制が廃止されたことと、京阪電鉄が明治43年に開通し、これまでの淀川の舟運を中心とした交通体系から陸路を中心とした交通体系へと変遷したことなどにより、市の中心は、現在の京阪枚方市駅周辺へと移りました。その結果、「泥町・三矢」は次第ににぎわいを失い、それにつられるかのように、明治

期に泥町にあった枚方町役場(枚方市役所)も、三矢、岡(岡東町)へと移動し、昭和35年には、現在の大垣内町に建設されました。

また、泥町の地名も、時代の流れとともに、泥の字の持つ語感や飛び地が非常に多かったので、行政上不便だという理由から、三矢町に合併され、消えてしまいました。

京阪枚方公園駅北口を出て西へしばらく進み、「歴史街道」の看板を見つければ、そこはもう、京街道「枚方宿」の西端、西見付です。「泥町・三矢」の往時をしのばせる町並みは、今も残っています。

徳川慶喜、坂本竜馬も駆け抜けたと言われる京街道。歴史ロマンを求めて、あなたも歩いてみませんか。



47 旧泥町(三矢町)



48 西見付(堤町)

その29 田口

(平成11年5月1日号—第200号)

枚方市駅北口から長尾方面行きのバスに乗り、中宮、須山町を過ぎると、田畑の中の集落を取り囲むように新興住宅が建っている一角があります。そこが、今回紹介する田口です。

田ノ口^{*1}のバス停におり立つと、その南側の小さな生け垣に囲まれた所に、「仁明[にんみょう]天皇外祖母贈正一位田口氏之墓」と刻まれた石碑が立っています。この石碑は、8～9世紀に生きた田口姫の墓で、彼女は仁明天皇(810～50)の外祖母として正一位を贈られ、田口小山墓に葬られたと言われています。



49 田口氏墓(田口3丁目)

その墓は、かつては今以上に大きく、立派なものだったと伝えられています。田口の地名は、この田口氏に由来しています。

もう一つ、この地の歴史を語る際に言われるものに「田口城」があります。この城は、和田正光という人が正平8年(文和2年)(1353)に築いたと『喜多氏系図』に記されており、小字城ノ山と言われた所が田口城の城跡であると伝えられています。また、城門に使われたという唐居敷[からいしき]が、田口の山田神社の境内に残されています。このように、古代から中世にかけて、田口は大いに脚光を浴びていました。



50 山田神社(田口1丁目)勸請縄

ところで、山田神社では毎年12月25日ごろに、伝統の勸請縄[かんじょうなわ]がつるされます。この儀式は、田口・出屋敷の10組が年番制で担当し、8間(約15メートル)の長いしめ縄をつくり、神社に祀っている天神さんの縁日に奉納します。その奉納では、村人が勸請縄を担ぎ、村中を伊勢音頭を歌いながらねり歩き、酒を酌み交わします。しかし、最近は交通事情等もあり、ねり歩きをしない組もあるそうです。

この田口には、いまだ田園風景が見られますが、市のごみ処理施設もあります。現在、枚方市全域から集められたごみは、田口地域にある穂谷川清掃工場で焼却処分されています。しかし、大量に発生するごみに処理が追いつかない状態の上、施設は老朽化しているため、本市は第2清掃工場の早期建設をめざしています^{*2}。

このように歴史と伝統が残っている反面、本市の難しい問題も抱えている田口。歴史の先人たちは、今の田口をどんな目で見つめているでしょう。

^{*1} 地元では「たのくち」と呼びならわしており、江戸時代の文書にも「田ノ口」「田の口」と表記されていることが多い。昭和49年から大字田口に住居表示が施行され、読みは「たぐち」とされたが、それ以前から設けられているバス停の名称は、従来の「田ノ口」である。

^{*2} 東部地区で建設中、平成20年度稼働予定。

その30 小倉

(平成11年7月15日号—第202号)

今回紹介する小倉[おぐら]地区は、京阪電車牧野駅と御殿山駅との間の東側に位置しています。

弘仁[こうにん]5年(814)嵯峨天皇が交野へ行幸されたときに、佐為[さい]・百濟[くだら]・栗倉[あわくら]の3寺に綿を施されたという記録が『類聚国史』[るいじゅうこくし]にあります。栗倉寺の所在地は明らかではありませんが、栗倉郷に当たる現在の小倉・渚地区にあったと考えられます。ここから「小倉」の地名は、栗倉(アワクラ)が小倉(オグラ)になまったという説も生まれています。

また、小倉の鎮守社である栗倉神社は、元和2年(1616)新たに八幡大神を勧請(神仏の分霊を招き祀る)した後、明治42年に片埜神社に合祀されました。しかし、昭和25年旧地(小倉)に戻され、「栗倉」の地名を今に伝えています。

ところで、小倉の古い集落から少し東にはずれた所に、有名な古墳があります。一般には、牧野車塚古墳の名で知られていますが、この土地の名前をとって小倉車塚古墳とも呼ばれています。この古墳は、市内に残る前方後円墳では、禁野車塚古墳と並んで屈指の規模を誇っており、大正11年(1922)には国の史跡に指定されています。大き



51・52 牧野車塚古墳(左)、史跡標柱(右)
(車塚1丁目)

さは、全長107.5メートル、後円部の直径54.5メートル、前方部の幅44メートルで前方部を東に向けています。また、周囲に幅約10メートルの空濠[からほり]をめぐるせ、西側から南側にかけては、今でも外提[がいてい]をとどめています。もっとも、主体部の構造や副葬品が明らかではないため、正確な築造年代はわかっていません。しかし、墳丘の形状から、古墳時代中期前半(5世紀前半)と推定されています*1。この古墳は、築造された当時のものとしては、外提を含めると北河内最大規模の前方後円墳であり、旧交野郡一帯の統合を達成した首長の墓と考えられています。牧野車塚古墳の南西方面には、赤塚・権現塚・子供塚・ショーガ塚などの古墳が分布していました。これらの墳丘はすべて消失しましたが、赤塚古墳出土の副葬品の記録から、牧野車塚古墳を盟主墳とする古墳群であったと思われます。

現在、牧野車塚古墳は、史跡公園として整備されています。一度この墳丘をめぐるって、古代のロマンに思いをはせるのも一興ではないでしょうか。

*1 車塚公園整備に先立つ発掘調査で、古墳時代前期後半(4世紀後半)に遡ることが判明した。

その31 野

(平成11年11月1日号—第203号)

J R津田駅から北に進み旧田辺街道のバス道を西に進むと、間もなく野村地域に入ります。「野」がつく町名は、野村北町、野村中町、野村元町、野村南町と春日野1・2丁目があり、これは住居表示されるまでの「大字野」の地区に当たります。地名の由来は、野村が洪積層の交野台地の中心に位置し、「山を持たない平野部の村」であるからとの説もありますが、定かではありません。

市東部の穂谷にある三之宮神社の縁起を記した『穂谷三之宮大明神年表録』*1によると、嘉祿[かろく]2年(1226)に三之宮神社が修復されました。そのとき奉加している村々の中に穂谷村・芝村(尊延寺村)とともに「野村郷」の名が見えます。これが、野村が記録に表れた最初で、すでに鎌倉時代には成立していたことがわかります。



53 春日神社(野村南町)

野村の鎮守社は春日神社で、祭神は春日四神のうち天兒屋根命[あめのこやねのみこと]です。津田・春日・野の3村とも春日神社を鎮守社とするのは、中世以来東部地域が興福寺[こうふくじ]の勢力下にあったため、春日大社の影響を受けたものと考えられます。野村のもう一つの鎮守社であった法楽寺宮は、明治5年(1872)に春日神社に合祀されました。

野村は、穂谷川の南側に広がる地域ですが、穂谷川の水量が少ないため、かんがい用のため池が多くつくられています。そのうち、文化9年(1812)津田村と野村が共同して「最合池」というため池を築いています。「最合」[もやい]とは、他の人と共同して事を行ったり、物を所有するという意味で、一般名詞がそのまま池名になっています。明治9年(1876)、池は野村が買収し、野村一村の所有となりました。最合の意味が失われてしまった「最合池」は穂谷川に寄り添うようにして、今も満水をたたえて人々に恵みを与えています。

歴史ある野村、今も昔の喜怒哀楽の声が聞こえてきそうなこの地、野村へあなたも一度訪れてみられてはどうか。



54 野村元町

*1 この史料は偽文書とする説があり、正しくは三之宮神社修復の初見は正嘉[しょうか]2年(1258)とされる。野村の初見も同様である。

その32 坂

(平成12年2月1日号—第205号)

江戸時代から続いた「坂村」は、明治22年4月、「牧野村」が成立したときに「牧野村大字坂」となりました。「大字坂」は、現在の牧野阪1～3丁目、西牧野1～4丁目、黄金野1丁目、牧野本町1～2丁目、東牧野町にかけた一帯に当たります。

地名には、その場所の地形をそのままとって名づけられたところも多いと言いますが、「坂」も、穂谷川右岸沿いの斜面に位置していたことから、この名がつけられたと言われていました。また、現在、牧野阪などの地名に使われている「阪」の字は、かつては土偏の「坂」でしたが、昭和41年の住居表示で「阪」の字に変更されました。

さて、この地には、垂仁天皇の時代、野見宿禰[\[のみすくね\]](#)が創建したと伝えられる、片埜[\[かたの\]](#)神社があります。現在の社殿は慶長7(1602)年に豊臣秀頼が再興したもので、本殿は国の重要文化財に、東門・南門と石造灯籠は府の有形文化財に指定されています。

また、この神社の北側には、牧野公園(京阪電車牧野駅下車、東へ徒歩約7分)があります。ここの桜は、



55 片埜神社本殿
(牧野阪2丁目)



56 片埜神社
石造灯籠

「牧野の桜」として枚方八景の一つに数えられており、毎年、数十年の年輪を刻んだ桜が咲き競い、花見の季節には大変な人出でにぎわいます。

このあたりは、平安時代には交野ヶ原と呼ばれ、桜やツツジ、ハギ、カエデなどが季節ごとに咲き乱れ、都の貴族だけでなく、付近の住人にとっても行楽の場になっていたようです。

今も昔も変わらずに行楽の地となっているこの場所に、桜の咲くころ、あなたも訪れてみてはどうでしょうか。

その33 尊延寺

(平成12年5月1日号—第206号)

枚方市駅から穂谷方面行きのバスに乗り、国道307号を30分ほど揺られると、国道の両側に寄り添うようにして立つ集落があります。生駒山系の北端に位置し、周囲は山で囲まれた里、そこが今回紹介する尊延寺[そんえんじ]です。

地名の由来ともなった尊延寺は、この地域の北東部にあり、天平3年(731)に勅願[ちよくがん]によって宣教大師[せんぎょうだいし]が建立したと伝えられています。

その後、文明18年(1486)には、尊延寺に18の僧房があったことが、『穂谷三之宮大明神年表録』^{*1}で明らかになりました。今はその僧房の一つの池之坊が往時をしのばせるだけです。



57 巖島神社末社春日神社本殿(尊延寺5丁目)

また、集落の南東部には巖島[いつくしま]神社があります。その末社の春日神社本殿は、建築様式からみて建造年代は室町時代中期に遡ることがわかり、昭和53年に国の重要文化財の指定を受けました。なお、本殿は平成6年に解体修理され、当時の姿に復元されています。

ところで、天保8年(1837)大塩平八郎の乱のとき、大塩に学んだ尊延寺村の深尾才次郎は、救民に立ち上がった大塩に加勢するため、村内のほか杉・穂谷村の農民らと大坂に向かいました。しかし、大塩の乱はすでに鎮圧されていたので、才次郎は能登に逃亡しましたが、捜査の手が伸びたのを知り自害し、村人は帰村の途中、またはその後捕らえられ処罰されたと『枚方市史』に記されています。

歴史の一コマをしのばせる当地を、皆さんも一度訪れてみられてはいかがでしょうか。



58 才次郎の墓(尊延寺5丁目)

^{*1} この史料は偽文書とする説があり、それによると信憑性に欠ける部分があるという。

その34 禁野

(平成12年8月1日号—第208号)

京阪電車枚方市駅から北東へ500メートルほど進むと天野川に至ります。左岸の低地と右岸の丘陵地一帯が今回ご紹介する禁野[きんや]地区(禁野村)です。

辞書などによると「禁野」とは、天皇の狩場と定め、私人の狩猟を許さなかった所と説明しています。その名が示すとおり、本市においても、平安から鎌倉時代にかけて、皇族の狩場となっていたようです。



59 禁野車塚古墳
(宮之阪5丁目)

また、この地には、国の史跡に指定されている禁野車塚古墳があります。この古墳は、全体の長さが110メートルにも及ぶ大規模な前方後円墳です。この地域が天野川と淀川が合流する地点に近い水上交通の要所であり、肥沃[ひよく]な農耕地であったことも考えると、被葬者はこの一帯を治める豪族の長であったのでしょうか。

ところで、禁野と聞いて、禁野火薬庫の爆発事故を思い出される方もいらっしゃるのではないのでしょうか。近代におけ

る禁野は、まさに軍事色の強い地域でした。ときに明治27年(1894)、日清戦争が起こると、陸軍は軍備拡張の一環として禁野火薬庫の設置を決定しました。当時は舟運が重要な役割を果たしており、宇治火薬製造所と大阪砲兵工廠[こうしょう]との間を結ぶ淀川流域で火薬庫に適当な用地として、禁野に白羽の矢が立ったのです。



60 禁野火薬庫土塁
(上野2丁目)

禁野火薬庫は明治29年(1896)に完成しましたが、その後、明治42年(1909)に爆発を起こし、民家の倒壊など大きな被害を出しました。しかし、危険な状況を危惧する周辺住民の訴えとは裏腹に、その後も拡張が行われ、昭和8年(1933)には43万ヘクタール(13万坪)もの大火薬庫となりました。そんな禁野火薬庫が、昭和14年(1939)、再び大爆発を起こします。この爆発は、前回の爆発事故をはるかに上回る死者100名弱^{*1}、負傷者600名を超す大惨事になりました。爆発当時の空は真っ赤に染まり、爆音は京都、大阪まで響いたと言います。

本市では、この2回目の爆発事故から50年後に当たる平成元年(1989)年に、3月1日を「平和の日」と決めました。

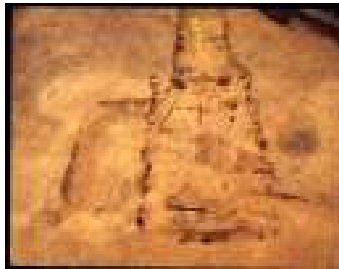
今は閑静なたたずまいを見せるこの地。悲惨な歴史を振り返ることはあっても、繰り返すことはあってはなりません。

^{*1} 陸軍の報告書では94人。これ以外に朝鮮人と思われる1人を含む2人の死者名を記した帳簿もある。

その35 宇山

(平成12年5月1日号—第206号)

京阪電車牧野駅から府道枚方高槻線を東へ進むと、約5分で左手に牧野公民館*1が見えてきます。そこから北側が今回紹介する宇山[うやま]です。穂谷川を望む台地上に位置し、北は養父、西は下島、東は招提、南が阪と接しています。



61 宇山1号墳横穴式木室と木棺直葬墓



62 宇山1号墳出土銀象嵌直刀鏢

宇山には、マンション建設に先立って発掘調査された2基の古墳がありました。両者とも円墳[えんぷん]で、土師器[はじき]・須恵器[すえき]のほか鉄鏃[てつぞく]や象嵌[ぞうがん]が施された直刀[ちよくとう]などが副葬されており、6世紀中頃から後半の築造と考えられています。

宇山の地名が最初に出てくる史料は、現在のところ、天文24年(1555)7月の『牧一宮神田帳』[まきいちのみやじんでんちょう](片埜神社文書)で、舟橋郷に「上山」の名が見えます。また、市内では宇山と招提の二村にしか残っていない文禄3年(1594)の検地帳でも、「河州牧之郷上山村」と記載されています。古くは上山と呼ばれていたのでしょう。ところが、元和2年(1616)の免状には「宇山村」となっています。江戸時代はじめに「上山」から「宇山」に改められたと考えられます。

さて、宇山の名にまつわり、平安時代に活躍した坂上田村麻呂[さかのうえのたむらまろ]と結びつける説があります。蝦夷[えぞ]を平定した田村麻呂は、降伏した首長阿弭流為[アテルイ]と母礼[モレ]の二人を連れて京都へ帰って来ました。田村麻呂の助命嘆願にもかかわらず、二人は「河内植山[うえやま]」で首をはねられてしまいました。「植山」という地名は、河内国には残っていないため、その地が改名前の「上山」ではないかと考えられたわけです。ただし、写本*2によっては、「杜山[もりやま]」、「楯山[すぎやま]」とも記されているので、その地が宇山に当たるのかどうかはまだ特定されず、蝦夷の英雄が没した地は、歴史の謎に包まれています。

このような古代のロマンあふれるまち、宇山を一度訪れてはいかがでしょうか。

*1 平成18年10月から牧野生涯学習市民センター。

*2 『日本紀略』。

その36 蹉跎

(平成13年2月1日号—第211号)

京阪光善寺駅から線路沿いの府道枚方八尾線を南へ数分歩いて行くと、左手に鳥居が立ち、山手に延びる参道に出くわします。この参道を上ったところに蹉跎[さだ]神社が鎮座しています。祭神は菅原道真[すがわらのみちざね]です。



23 蹉跎神社(南中振1丁目)

この神社は、どうして蹉跎と名づけられたのでしょうか。昌泰[しょうたい]4年(901)、菅原道真が大宰府に左遷され、京都を発ち九州に向かう途中、この地で休息し、都の山々を望み名残を惜しみました。その道真を慕って、娘の

苅屋姫[かりやひめ]が後を追って来たのですが、姫が着いたときは、すでに道真は旅立った後でした。姫は、ここから父の行方を見晴らし、足ずりして悲嘆の涙に暮れました。足ずりとは、嘆き悲しんでじだんだを踏むことで、蹉跎とも表現します。ここから、蹉跎という地名が生まれたといえます。

道真は、姫の事情を哀れみ、大宰府から自作の木像を送り与えました。天暦[てんりやく]5年(951)この木像を御神体として、社殿[しゃでん]を設け、近郷の氏神としたのが蹉跎神社の起源です。

明治22年(1889)町村制の施行に先立って、町村合併が進められました。その時、中振・走谷・出口の3村が合併して蹉跎村が誕生しました。村名は、3村共通の鎮守社である蹉跎神社からその名をとりました。

ところが、蹉跎村は、昭和13年(1938)、枚方町など6町村が合併した際に、なくなりました。その後、地名としてはあまり使われなくなりましたが、現在、神社のほか、保育所、幼稚園、小学校、中学校や公民館^{*1}など公共施設にその名をとどめています。

蹉跎山にも開発の波が押し寄せ、神社周辺だけが今も鬱蒼[うっそう]とした木々に覆われています。道真にまつわる神社や旧跡は各地にあります。枚方の旧跡を一度訪ねて、道真親子に思いをはせてみてはいかがでしょうか。

^{*1} 平成18年10月から蹉跎生涯学習市民センター。

その37 香里園

(平成13年5月1日号—第212号)

今回紹介する香里園は、京阪電車香里園駅の周辺で、枚方市と寝屋川市にまたがって広がる地域です。枚方市には香里園町、香里園桜木町、香里園東之町、香里園山之手町と香里園の名がつく町名が四つあります。寝屋川市にも「こおり」と名のつく町名がありますが、枚方市と同様に「香里」の漢字を当てる香里本通町などのほか、郡元町のように「郡」の漢字を当てる町名もあります。なお、枚方市では「こうり」、寝屋川市では「こおり」と振り仮名を振っています。

もともとこのあたりは、古代に茨田[まった]郡の役所があった郡衙[ぐんが]跡と推定され、郡の地名はこれに由来するといえます。江戸時代は郡村で、明治22年(1889)に7カ村が合併して友呂岐[ともろぎ]村となり、郡はその大字となりました。

明治40年(1907)京阪電車の開通に先立って、阪神電車沿線の遊園地「香櫨園」[こうろえん]をヒントに、地元で香里遊園地計画が持ち上がりました。それを京阪電鉄が引き継いで、明治43年(1910)に香里遊園として開園し、駅名も「香里」となりました。「香里園」と改名されたのは昭和13年(1938)です。香里遊園は、明治43年の秋に、「菊人形」を開催し、人気を博しました。しかし、大正元年(1912)に現在の枚方パークへ移転して、以来枚方菊人形として広く知られるようになりました。現在も毎年秋に開催される菊人形は、枚方市の名物の一つとして根強い人気を誇っています*1。

一方、香里遊園跡は、住宅地として開発されることになりましたが、大阪からみて鬼門[きもん]の方角に当たるため、沿線開発が遅れていました。しかし、昭和に入って住宅開発が本格化し、「西の芦屋、東の香里園」といわれるように、大きな屋敷が建ち並ぶ閑静な住宅街になっています。



64 創造の森(香里園山之手町)

*1 京阪電鉄主催のひらかた大菊人形は平成17年をもって終了した。

その38 氷室

(平成13年6月15日号—第213号)

今回紹介するのは、本市の東部地域を表す氷室です。明治22年(1889)の町村制の施行に先立ち、町村合併が進められ、杉、尊延寺、穂谷の3村が合併して氷室村ができました。この村名は村内に氷室の古跡があって、歴史上有名だったとされたことから名づけられたものです。氷室とは、宮廷で必要な氷を確保するため、冬に池の天然氷を取って、わらなどをかぶせて夏まで貯蔵する施設です。

天長8年(831)8月、朝廷が河内国に増設した三つの氷室のうち、二つが杉、尊延寺に設けられたと考えられています*1。遺構は見つかっていませんが、尊延寺の檜谷[むろたに]や杉の南の下の谷がその跡といわれています。

氷室村は、津田村・菅原村と合併して津田町が誕生する昭和15年まで存続しました。現在では、尊延寺北方の住宅地である氷室台の町名や小学校、保育所などにその名を残しています。

氷室地域は、生駒山地の延長部で、穂谷川が南東から北西に貫流しています。市街地に比べ、夏は涼しく、冬は寒さが厳しいため、地酒やそうめんづくりに適しており、江戸時代から地場産業として繁栄した歴史を持っています。



65 そうめんの門干し

*1 『日本後紀』には河内国に3カ所としか記載されていない。氷室の場所として穂谷・杉・芝(尊延寺)などの地名が現れる『氷室郷穂谷氷室遺址権輿紀』は、偽文書であるという説がある。

その39 山田

(平成13年8月15日号—第214号)

今回紹介する山田は、穂谷川左岸一帯に広がる地域で、本市のほぼ中央に位置しています。また、国道1号と府道杉田口禁野線が交差する交通の要衝です。

この地域は、『和名鈔』[わみょうしょう]に記されている山田郷に比定[ひてい]され、9世紀に諸氏の系譜を集成した『新撰姓氏録』[しんせんしょうじろく]には、山田宿禰[すくね]、山田連[むらじ]、山田造[みやつこ]など山田郷と関係すると見られる氏が記されています。

その後、郷名はすたれましたが、明治5年(1872)田口の氏神である天神社が、山田池の北東にあった春日社を合祀して山田神社と改称し、古代の郷名が復活しました。続いて明治22年(1889)、甲斐田・片銚・田口・中宮の4村が合併してできた新村は、山田村と名付けられました。しかし、この山田村の名も昭和13年(1938)枚方町など6町村が合併した際になくなり、今では、小学校、中学校、神社、公園などにその名を残すだけとなりました。

山田と聞いて頭に浮かぶのは、山田池ではないでしょうか。山田池は鴨池として有名で、カモの狩猟権を入札していました。カモが数万羽飛来して池面を埋め尽くしたので、無双[むそう]という網で捕獲していました。近年は周辺が開発され、飛来数も激減しました。



66 山田池浮御堂

現在の山田池は、府立公園として整備され、季節を問わずいろいろな野鳥を観察することができ、早朝にはバードウォッチングを楽しむ人を見かけます。また、池の一角には、花菖蒲[はなしょうぶ]園があり、花の季節には多くの市民が訪れる憩いの場となっています。

その40 御殿山

(平成14年5月15日号—第218号)

今回紹介する御殿山は、京阪電車の駅名にもなっており、広く知られています。地名の由来は、駅から東に見える小高い山です。江戸時代、当地の領主永井尚庸[ながいなおつね]が陣屋を設けたことから、「御殿山」と呼ばれるようになったといわれています。

御殿山駅から東へ坂を登っていくと、御殿山美術センター*1と御殿山図書館があります。昭和4年(1929)、南画[なんが]家矢野橋村[やのきょうそん]が設立した大阪美術学校が、この地に移転、京阪電鉄は御殿山駅を新設しました。

御殿山美術センターは、昭和62年(1987)、その跡地に建設されたもので、絵を描いたり、陶芸をしたり、市民の創作活動の拠点として利用されています。また、矢野橋村や大阪美術学校出身画家の絵画も収蔵されています。



67 御殿山生涯学習美術センター



68 御殿山神社(渚本町)

美術センターからさらに進むと、御殿山神社に行き着きます。御殿山神社は渚村の氏神で、明治3年(1870)、渚院跡地の観音寺境内から遷座[せんざ]してきました。この時、神社名も西栗倉[にしあわくら]神社から御殿山神社に改称されました。遷座の様子を極彩色で描いた奉納額が今に伝えられています。

神社からの眺望はよく、眼下に広がる町並みや北摂の山並みも一望できます。あなたも一度訪ねてみませんか。

*1 平成18年10月から御殿山生涯学習美術センター。

その41 菅原

(平成14年8月1日号—第220号)

J R片町線の藤阪駅と長尾駅の間あたりの、府道交野久御山線沿いに菅原[すがわら]小学校(藤阪中町)があります。創立95年^{*1}に及ぶ歴史ある小学校ですが、なぜ校名が菅原なのでしょう。



69 菅原神社(藤阪天神町)

明治22年(1889)の町村制施行に先立ち、町村合併が進められ、長尾村と藤阪村が合併して、菅原村が誕生しました。新しい村名は、両村とも鎮守社がそれぞれ菅原神社だったため、その名が採用されました。そして、その菅原が小学校名になりました。

昭和15年(1940)に、津田・菅原・氷室の3村が合併して津田町となり、菅原村はなくなりましたが、地域を表す地名として残りました。菅

原小学校のほか、菅原公民館^{*2}などにその名をとどめています。

藤阪の菅原神社は、津田氏が天文年間(1532~55)に造営したと言われ、参道を片町線が横切っているため、地下道をくぐらなければなりません。

一方、J R長尾駅の南方にある長尾の菅原神社は、江戸時代の領主であった久貝正世[くがいまさよ]が慶安3年(1650)、祖先ゆかりの長岡天神(長岡京市)の分霊を勧請[かんじょう]した神社です。参道の鳥居では、「正徳四年」(1714)のものが一番古く、「奉為久貝家武運長久」と記されたものもあります。また、社叢[しゃそう]はテンダイウヤク^{*3}生育地としても貴重です。



70 菅原神社(長尾宮前1丁目)の
テンダイウヤク

長尾には、菅原神社のほか、菩提寺正俊寺[しょうしゅんじ]や陣屋跡など、久貝氏にまつわる史跡がたくさん残っています。みなさんも、一度藤阪・長尾を散策してみませんか。

^{*1} 明治40年(1907)に長尾・王仁の両尋常小学校が統合された。

^{*2} 平成18年10月から菅原生涯学習市民センター。

^{*3} テンダイウヤクは秦の始皇帝が徐福に命じて探させた「不老長寿の薬樹」という伝説があるが、中国原産で江戸時代に日本に渡来し、薬として重用された。菅原神社の生育地は大阪府内でも貴重な群落である。

その42 牧野

(平成15年2月1日号—第223号)

京阪牧野駅の周辺には、牧野と名のつく町名が多くあります。牧野北町、牧野下島町、牧野本町、牧野阪、西牧野、東牧野町です。今回は牧野を紹介します。

明治22年の町村制施行に先立ち、町村合併が進められ、養父・上島・下島・宇山・坂・小倉・禁野・磯島・渚の9カ村が合併し、牧野村が誕生しました。新しい村名は、この一帯が牧郷だったことから名づけられました。平安時代、楠葉を含めたこのあたりは、摂関家の楠葉牧で、牛馬が放牧されていました。

牧野村は、昭和10年に隣村の招提村と合併して殿山町になり、さらに同13年に枚方町と合併しました。

昭和の初め^{*1}、大阪女子高等医学専門学校(現関西医科大学)が宇山に開校し、大阪歯科医学専門学校(現大阪歯科大学)が坂に、大阪美術学校が渚に、それぞれ移転してきたため、牧野は一躍学校の街となりました。

牧野の中心に位置するのが、牧野駅から東へ約500メートルにある片埜神社です。社伝によると、野見宿禰が須佐之男命[すさのおのみこと]を祀ったのが始まりとい



71 片埜神社南門(牧野阪2丁目)

ます。現在の本殿は、慶長7年(1602)に豊臣秀頼が再興したもので、桃山時代の華麗な建築様式を今に伝え、国の重要文化財に指定されています。

また、その東方では古代の屋瓦類がよく発見されていましたが、最近の発掘調査で、飛鳥時代創建の九頭神廃寺の伽藍が明らかになりつつあります^{*2}。

みなさんも、古い歴史を持つ牧野を散策してみたいはいかがでしょうか。



72 九頭神廃寺屋瓦出土状況

^{*1} 昭和3年、大阪女子高等医学専門学校開校・大阪歯科医学専門学校移転。昭和4年、大阪美術学校移転。

^{*2} 府営枚方牧野住宅建てかえに先立つ発掘調査で、築地[ついで]により区画された倉庫群(倉垣院[そうえんいん])や幡・幢などを掲げる施設(宝幢[ほうどう]遺構)などが検出された。古代寺院の付属院地として稀有な遺構群であるため、平成19年4月に市の史跡に指定された。

その43 出屋敷

(平成16年2月1日号—第229号)



73 東高野街道(出屋敷元町
1丁目)

京都の東寺と和歌山の高野山を結ぶ東高野街道。この街道沿いに江戸時代、田口村の枝郷として発達したのが出屋敷です。

集落の南側入口付近には東高野街道と彫られた高さ2メートルほどの古びた石柱があり、かつてにぎわった街道の面影が残ります。その向かいには、弘法大師が千度詣[せんどもうで]の折に休憩したと伝わる円通寺があり、村には大師が地面を錫杖[しゃくじょう]で突くと水がわいて出たという弘法井戸が今も残ります。

それにしても近年の変わりようはどうでしょう。大型バスが通れるほどの送水管が埋められた通称「水道みち」(府道枚方交野寝屋川線)が、集落のそばを通ったかと思えば、昭和58年には巨大な総合体育館が出現、平成15年には水道みちに立体交差する市道枚方藤阪線も開通しま

した。市の鳥となったカワセミを初め多数の野鳥がすみ、2月から3月にかけて330本の梅が咲き誇る山田池公園の拡張工事も進んでいます*1。

弘法大師もさぞ驚いていることでしょう。



74 円通寺(出屋敷元町1丁目)

*1 平成19年4月現在、山田池公園拡張工事は一部を除きほぼ完了している。

楠葉 中之芝

その44 (平成16年8月1日号—第232号)

枚方市の北端、楠葉中之芝には、京阪本線の沿線では珍しく田園風景が広がります。樹齢600年とも言われるクスノキがあり参勤交代で長州藩が休息したこともある久親恩寺[くしんおんじ]、行基49院の一つ・久修園院[くしゅうおんいん]など、のどかな中にも歴史が感じられます。

このあたりは古くから交通の要衝で、たびたび戦乱にも見舞われました。川向いの山崎では羽柴秀吉と明智光秀が天下取りを争い、久修園院は大坂の陣で堂宇を焼かれました。



75 久修園院(楠葉中之芝2丁目)



76 楠葉砲台跡標柱(楠葉中之芝2丁目)

そして今、幕末がブームです*1。徳川時代の幕をおろした大政奉還の翌慶応4年(1867)1月3日、鳥羽・伏見で始まった戊辰[ぼしん]の役は、会津藩など旧幕府方が総崩れとなり、民家に火を放ちながら、このあたりを通過して京街道を大坂まで敗走しました。黒船の来航以降、外敵の侵入から京を守るために設けられ、戊辰の役では小浜藩が守った砲台は今は跡形もなく、小さな石碑だけが当時を物語ります。

*1 平成16年NHK大河ドラマ「新選組！」。

その45 川越

(平成16年11月1日号—第233号)

川越は、天野川を挟んだ村野、茄子作、山之上、田宮の4カ村が明治22年に合併してできた村で、今は小学校などにその名を残すのみです。当時は、田畑が広がるのどかな農村地帯でしたが、昭和31年に始まった香里団地の建設以来、あたりは一変しました。

平安時代、在原業平が天上の「天の川」になぞらえて和歌に詠んだ天野川。現代でも、カワセミなどの野鳥だけでなく、私たちにとっても貴重なオアシスとなっています。



77 南部生涯学習市民センター

ところで、以前、川越小学校は藤田山と呼ばれる小高い丘の上にあり、校庭に植えられた大きなユーカリの木は同校のシンボルとなっていました。平成15年、そこから700メートル離れたところに生涯学習の拠点として開館した南部市民センター^{*1}の一角には、ユーカリの木が植えられ、当時の面影を今に伝えています。

^{*1} 平成18年10月から南部生涯学習市民センター。

その46 車塚

(平成17年5月1日号—第236号)

京阪電車牧野駅を降り、穂谷川沿いをしばらく上流へ歩くと小高い丘に建つ市立中央図書館と輝きプラザきららが見えてきます。そこが今回紹介する本市で一番新しい町・車塚です。

このあたりは関西外大跡地における市の「安心と輝きの杜」整備計画で一変しました。跡地全体は防災公園として、建物は市立中央図書館と地域防災センター、生涯学習情報プラザ等として整備され、平成17年4月17日の施設の開館式では、多くの市民でにぎわいました。



78 牧野車塚古墳鱧付円筒埴輪出土状況

さて、地名の由来となった牧野車塚古墳(小倉東町)は、全長107メートルの前方後円墳で、北河内にある古墳の中では最大級の規模を誇っています。全国にも車塚の名を持つ古墳が数多くありますが、その名の由来は、上から見ると、皇族などが乗った牛車[ぎっしゃ]の形に似ているからと言われています。16年度の発掘調査では、古墳の盛り土を覆っていた葺石[ふきいし]や円筒埴輪[えんとうはにわ]など数多くの遺物が出土しました。葺石は、吉野川流域などから運ばれてきたことが判明していることから、淀川の舟運を通じて遠方との交流があったことがうかがえます。

皆さんも古代のロマンと魅力ある施設がそろそろ車塚を訪れてみませんか。

さて、地名の由来となった牧野車塚古墳(小倉東町)は、全長107メートルの前方後円墳で、北河内にある古墳の中では最大級の規模を誇っています。全国にも車塚の名を持つ古墳が数多くありますが、その名の



79 牧野車塚古墳墳丘テラス葺石出土状況

その47 高塚

(平成17年8月1日号—第238号)

市内には文徳[もんとく]天皇の第1皇子であった惟喬親王[これたかしのう]にまつわる言い伝えが幾つか残されています。その一つが今回紹介する高塚町で、昔は鷹塚山と呼ばれていました。平安時代、枚方は貴族の遊獵地として知られていました。惟喬親王もたびたび訪れ、在原業平[ありわらのなりひら]らとともに狩りや花見を楽しんだと伝えられています。あるとき、親王のかわいがっていた鷹が死んでしまい、枚方丘陵で最も高いこの地に葬ったことから、後に鷹塚山と呼ばれるようになったというのです。



80 鷹塚山(高塚町)

ところで、鷹塚山は、現在造成されて従来の地形から大幅に改変されていますが、残された景観から古墳だと考えられています。発掘調査の結果、その周辺から、弥生時代後期の集落遺跡も見つかっています。さらに、吉備[きび]地方(岡山県)独特の分銅形土製品が出土しており、遠く離れた吉備との淀川を介した交流をうかがわせます。



81 鷹塚山遺跡出土分銅形土製品

江戸時代には淀川を一望できる景勝地であった鷹塚山。現在は、周辺の住宅開発で、景色はさま変わりしましたが、淀川は今も昔も変わらず、悠々と流れています。

その48 王仁公園

(平成17年11月1日号—第239号)



82 王仁公園

枚方市には王仁[\[わに\]](#)公園という町名があります。由来は、5世紀初頭に朝鮮半島の百済から渡来し、論語と千字文[\[せんじもん\]](#)をもたらしたとされる王仁博士によります。この博士の墓と伝えられる府指定史跡「伝王仁墓」(藤阪東町2丁目)にちなんで名づけられた王仁公園は、昭和48年以降、順次整備を重ねて現在の姿になり、昭和55年には町名も王仁公園となりました。

総合公園である王仁公園は、プールやテニスコート、運動広場などのほか、豊かな緑が広が

り、スポーツやレクリエーションを楽しむには最適です。

また、園内にそびえる平和の像は、昭和62年、市民の寄付金をもとに、市内の彫刻家・池田遊子[\[いけだゆうし\]](#)さんのデザインで建設されたもので、「恒久平和」への枚方市民の願いが込められています。

まもなく、王仁公園は、トウカエデやナンキンハゼなど木々が色づく季節となります。JR藤阪駅から東へ歩いて約10分、みなさんも一度、訪れてみませんか。



83 平和の像(王仁公園)

枚方 上之町

その49

(平成18年5月1日号—第242号)

枚方市駅から鉄道高架沿いに西へ500メートル、緑が色濃い万年寺山への階段を登ると急に視界が開けてきます。ここ万年寺山眺望拠点からは、雄大な淀川の流れや芝生が広がる河川公園、遠くは摂津の山々や大阪市内の高層ビル群まで見渡せます。文禄4年(1595)、豊臣秀吉はこの地に御茶屋御殿を建て、行き交う船や街道の人の流れを監視させるとともに、枚方城主であった本多政康の娘・乙御前[おとごぜん]を住ませたとされています。御茶屋御殿は延宝7年(1679)枚方宿の大火で類焼、消滅しました。



84 御茶屋御殿跡

御殿跡に隣接して鎮座する意賀美[おかみ]神社は、明治初期の廃仏毀釈[はいぶつきしゃく]で廃寺となった万年寺跡に、伊加賀から移された式内社です。10月中頃の秋祭りには、ふとん太鼓の巡行が旧枚方宿地区でにぎやかに行われます。



85 旧万年寺石塔

花が終わり青葉を増しつつある意賀美神社の梅林は、かつて枚方小学校があったところで、一帯は「万年寺山の緑陰」として枚方八景の一つにも選ばれています。

神社から南東へ少し歩けば樹齢700年、府の天然記念物・むくの木もあります。閑静で落ち着いたまちなみの枚方上之町界わいを、皆さんも一度散策してみませんか。

その50 交野ヶ原

(平成18年8月1日号—第244号)

交野[かたの]といえ、今日では交野市のことを指しますが、明治29年までは現枚方市域の大部分を含む交野郡という広い領域がありました。交野郡は太宝[たいほう]2年(702)頃に茨田[まつた]郡から分割して設けられたもので、以後、交野といえ、現在の枚方市域のことを指している場合が多いのです。

交野郡の中央部を占める台地・低丘陵の部分が交野ヶ原と呼ばれていました。この



86 惟喬親王遊獵(『河内名所図会』)

地は水田に適せず鳥獣が多く生息し、長岡京・平安京からもほど近いため、桓武[かむむ]天皇を初め平安貴族たちが鷹狩[たかがり]などで頻りに訪れています。鷹狩は、飼いならした鷹にカモやウサギなどの鳥獣を捕まえさせるもので、桓武天皇は殊に好んだそうです。交野には禁野[きんや]と呼ばれる天皇の狩場が設けられ、庶民が狩りをするのを禁じていました。今も枚方市内には禁野の地名が残っています。

また、清少納言[せいしょうなごん]は『枕草子[まくらのそうし]』で趣のある野として交野を挙げています。風光明媚[ふうこうめいび]な交野は、和歌の題材として多くの歌に詠まれました。惟喬親王[これたかしんのう]の別荘である渚院[なぎさのいん]の桜を見て在原業平[ありわらのなりひら]が詠んだ「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(『伊勢物語』・『古今和歌集』)によって、交野と桜が強く結びつけられるようになります。

鎌倉時代になると藤原俊成[ふじわらのしゅんせい]は「またや見む交野のみ野のさくらがり花の雪散る春のあけぼの」(『新古今和歌集』)と詠み、さらに時代が下ると『太平記』では俊成の歌を踏まえて「落花の雪に踏み迷う交野の春の桜狩、紅葉の錦を着て帰る嵐の山の秋の暮れ」というように、嵐山の紅葉と並んで交野と桜は切り離せない関係として定着したのです。

現在、市内には百濟寺跡公園・牧野公園や船橋川の堤防など、身近なお花見スポットが点在し、地域の人たちに親しまれています*1。

*1 これまでの「菊」に追加して、平成19年2月に「桜」を市の花に制定した。

あんなとこ こんなトコ
～その1からその50～

平成19年9月発行

編集・発行 枚方市議会報編集委員会